

春と冬のリターンマッチが長い間続き、チューリップの芽の群れにワクワクしたかと思うとみぞれになったりでしたが、どうやら、やっと春になったようです。突然晴れて、暖かくなりました。

そんなある日の早朝に、ドリトル先生は人工股関節の手術を受けました。優しく、行動的で機転の利く、義理の次男が車の運転や手術の付き添いをしてくれ、大助かりでした。ドリトル先生には手術のストレスとケベックのなまりのフランス語が少し重すぎて、パニックってしまいそうでした。

手術は、1日で終わり、病院に泊まることはありません。医学的には、画期的ですが、それで大丈夫？ やや心配でした。人工股関節は大きな4.2センチのセラミックのものです。手術は順調に終わり、麻酔からもしっかりと覚め、しばらくすると、様子を見ながら、リハビリの指導を受け、薬の処方箋を受け取り、歩行器を使いながら帰宅しました。その間、12時間。あっという間の出来事でした。

まだ治療の薬が効いているせいか、

「あー痛くない、痛くない。」

上機嫌です。病院では、手術後放っておけば、歩行器なしで歩きそうで、

「あー勝手に歩いてはだめだよ、パパ。」

次男が慌てて追いかけてきました。あまりのあっけなさに、ドリトル先生は、天候不順で外科医が到着せず、そのまま帰されたのではないかと疑ったほど、目覚めは爽やかで、何事もなかったかのようなようでした。

「股関節は新しくても、手術のため筋肉を15センチも切ってるし、新しい股関節になれる訓練があるんだから。あーそっちはだめ。」次男は大忙しだったようです。

術後は暫くは射たれた鎮静剤が効いていて、朗らかすぎるほどでした。帰宅後は、空腹のせいかステーキをペロっと平らげ、早々と寝室にひきあげて、鼻ちょうちんで爆睡していました。

ケベックの医療制度はよくできていて、病院と直結した医療センターから、手術前に一度フィジオセラピストが様子を見にき、術後は、毎日誰かがリハビリの指導にやってきます。目標は、健康な時の活動のできる状態に戻すことだそうです。看護婦も血圧や採血や傷口のテープの取り替えなど、患者の様子を見に、2日ごとにやってきます。

「嬉しいなあ、君みたいな綺麗な人のフィジオセラピストだなんて」

「えっ？むっ！」

ドリトル先生は軽く無視されながらも、嬉しそうに指導に従ってリハビリのエクササイズをしています。

(セクハラにとられるかも、ドリトル先生？怖いMe tooですよ。)

次の日のフィジオセラピストも可愛い、若い女性で、これでまたドリトル先生の1日が楽しく過ぎていきそうでした。どうやら、痛み止めの強い薬でうとうとしながら過ごすより、ハーレムに美女の群れと一緒に置いておいたが、回復がはやそうです。

「こんにちわ。看護婦ですが。」

この日は看護婦もほぼ同時にやってきました。彼女は有能で爽やかな人でした。ただ、やや太め。

「ちょっと腕を出してください。血圧を測ります。」

ドリトル先生の笑顔の質はやや落ち、無愛想にどさっと腕が投げ出されます。男って、かなり敏感に、しかも残酷に女性の美に反応するようです。ドリトル先生、ちょっと正直過ぎませんか。

「パパ元気にしてる？」

次男が時を同じくして顔をだしました。余りの人の数にびっくりしたようでした。

「みてみて、頑張ってリハビリしてるよ。」

「素晴らしい。僕、これからメイン州立大学にインタビューに行ってくるから。」

「そうだったね。頑張ってきなさい。こんな時こそリラックス。結果はどうでも良いじゃないか。最終審査に残っただけでも貴重な経験だ。」

義理の次男は森林と地球温暖化の研究が認められ、メイン州立大学の教授職のインタビューを受けることになっているのです。狭き門、大変そうです。

「どんな試験なの？」

「現職の教授人たちと一緒にまず朝食、次に、講義の実演が30分、他の教授と昼食、午後は研究を発表をし、自分についても30分かけて説明するんだ。それが終わると、教授たちと夕食。講義、発表、食事も会話も全てが試験なんだ。それで総合的に判断するらしい。」

「わー厳しそう。試験のポイントは何なの？」

「僕が何者か、どんな能力があり、世の中でどういう役にたつのかアピールするんだ。僕が、サイエンスやネイチャーに書いた記事以上に、僕と他の人との違いの演出が必要なんだ。」

「アカデミックな要素は？」

「それは勿論なんだけど、アメリカの大学は成り立ちが違い、他の要素が大学教育にあるんだ。」

「それは初耳ね。」

「政府が、当初ね、大学設立の資金は出すから、地域の産業や経済に結びつき、地域の人達の生活の向上に役立つものであることを大学教育に義務づけているんだ。例えば、メイン州なら、漁業や林業に携わる人達を養成し、協力していくんだ。大学の授業、学生の指導、自分の研究の他に、地域のコミュニティーに参加してボランティア活動をするのも義務なんだ。」

「給料は高いとしても、中身びっしりの教授職だわね。自分の時間なんてなさそう。」

「大学はアカデミックな孤立した教育機関ではなく、効率的な物であることが大事らしい。ヨーロッパとは全く違うんだ。」

義理の次男の背中がとても大きく感じられた瞬間でした。さて、結果はどうなることやら。